

連載：授業力向上を目指した校内研修

<第3回 「日常的な授業改善に向けて」>

福島県教育センター研究調査チーム

本連載の第1回は、「教材観」「児童観・生徒観」「指導観」の「三つの観」の見直しから授業改善の課題を明らかにし、その解決に向けた一般的な授業研究の進め方を紹介しました。第2回は、授業分析の方法や授業の日常的な振り返りの大切さについて述べてきました。

福島県教育センターが平成17年度に実施した「ふくしまの教職意識調査」によると、本県の教師の今後5年以内の目標として最も多かったのは、「教科等の学習指導力を高めたい」でした。事実、県内の多くの学校では、授業力向上に向けた校内研修としての授業研究が実施されています。

そのような状況にあるにもかかわらず、教育センターの研修講座に参加した研修者の中からは、「校内研修での成果や課題を日ごろの授業に生かすことがなかなかできない」という声も聞かれます。授業改善が必要だ、授業をよりよく変えていきたいという意識を持ってはいるものの、日ごろの授業改善になかなか結び付いていかないということも多いのではないのでしょうか。

本連載の第3回目では、「日常的な授業改善」に視点を当てて、授業を変えるためにどうするか、授業力向上のために、どのように取り組んでいけばよいのかを考えてみましょう。

授業を変えるために

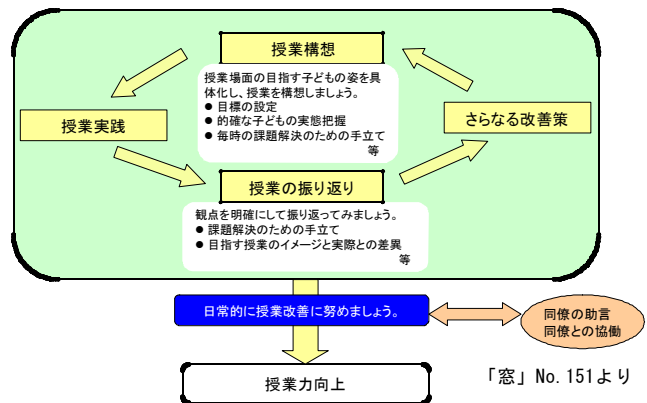
1時間1時間の授業を構想する前に、まず単元全体を分析し、単元の展開を構想することが必要です。単元の展開を構想するに当たっては、児童生徒の実態を興味・関心、思考力、知識・理解等の状況などから把握することに努めましょう。そして、単元の目標に迫るために、どのような教材で、どのような内容を、どのくらいの時間でどのような活動を通して教え、学ばせるかを吟味します。

次に、1時間の授業について構想することになります。

この際には、実際の授業の場面での児童生徒の「分かった!できた!」という姿を具体的にイメージしてみましょう。そうすることにより、児童生徒の「分かった!できた!」という姿を授業で実現するには、どのような発問や教材提示、場の設定をすればよいか分らなくなってくる。

自分の授業の「何を」「どのように」改善していけばよいか分からないという場合、この目指す「授業のイメージ」が明確になっていないことが多いのではないのでしょうか。

授業を変えるために、「授業のイメージ」を明確にして、授業を構想することが大切です。



日常的な授業改善を図るために

授業では、多くの要素が複雑に絡み合っていますが、「三つの観」は授業を振り返る上で、常に意識しておきたい視点です。思うように授業が進まない、児童生徒の思考が深まらないなどと悩んだと

きには、「三つの観」を手掛かりに自身の課題を探ってみましょう。この課題の解決を図っていくことが、目指す「授業のイメージ」に近づくことにつながり、そして授業改善につながると考えます。

このことを踏まえながら、日々の授業の中から、授業改善の視点を見だし、具体的な手立てを明らかにしていくことが大切です。そのための方策について考えていきます。

1 振り返りのための資料を収集する

(1) 週指導計画の活用

主に小・中学校において各教員が作成している週指導計画を活用し、実践していることを日々記録していくことは、手軽に継続できる振り返りとして有効です。

週指導計画は、多くの場合手元に置いているものなので、自分の授業改善の課題や具体的な手立てを意識しながら、授業後に手軽に実践を振り返ることができます。記録をする際には、授業構想と実際の授業の差異を踏まえ、「三つの観」を手掛かりにしたとき、どれに課題があるのかを意識して振り返ることが大切です。

(2) 日々の授業記録

E中学校のF先生は、授業研究をするに当たって、1単元を通して授業を振り返り、その都度自分の授業の課題を明らかにするための記録をしながら授業改善を進めてきました。

授業で念頭に置いている生徒の学び合いの状況を中心に、できるだけ手短かに記録してきました。以下はF先生の振り返りと、課題解決の記録です。

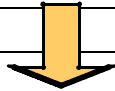
<第5時→第6時>

<第5時：(x, y) から比例の式を求める>

(授業終了後の振り返り)

表から直観的にとらえる生徒の発想を生かすことができなかったことが反省点である。生徒同士の考えの練り上げがなく、考えが深まらなかった。

小グループでの話し合いの場を確保することが必要である。



<第6時：座標>

(授業終了後の振り返り)

生徒に小グループでの話し合いの留意点として「自分の考えを人に伝えて、考えを深めること」「二つ三つといろいろな考えを出すこと」を指示した。これにより、小グループだけでなく、全体での練り上げ(の場面)においても生徒から出た疑問を他の生徒が考え、解決を目指す学び合いの姿が見られた。

2 授業改善のための課題を見いだす ～ 課題解決のために ～

(1) 同僚とともに

福島県教育センターが、平成17年度に実施した教職意識調査結果から、「先輩教職員からアドバイスを受ける」「同僚と様々な話をする」ことなどが、教員にとって自己の課題を解決する上で重要な役割を果たしていることが分かります。

日ごろの授業の工夫点や、児童生徒に起きた出来事、困った出来事などを話せる場が校内に必

要です。校内研修における授業研究や学年部会、教科部会などで同僚に声をかけて、多くのアドバイスを聞き、解決の方向を見いだしていきましょう。

G小学校では、通常行っている学年会の前半の30分間に、授業研究会で明確にした授業改善の課題を共有し合い、日常的に解決していくための見通しや具体的な手立てを探る話し合いを入れることにしました。とかく行事の連絡等が中心になりがちな学年会ですが、授業実践の状況についても情報交換することで、それぞれの先生方のその後の授業改善に生きる話し合いの場を持つことができました。

(2) 多様な情報の収集

同僚との話し合いだけでなく、先行研究や文献から課題解決の手立てを見いだすことも有効です。個人や学校で所蔵している書籍では不十分な場合は、公共の図書館やデータベースを活用することによって、必要とする資料を探ることができます。

① 教育センターの活用

教育センター内「カリキュラムセンター」では、小・中・高等学校の教科書や県内公立学校の教育課程が閲覧できます。また、全国の研究・教育機関の研究紀要や教育図書、教育雑誌等も活用できます。福島県教育センターのHPから、所蔵している資料の検索をすることができます(右図)。

(資料検索：http://www.center.fks.ed.jp/kensaku_8/index.htm)

このページを開いて、探している資料を検索します。不明な点がありましたらカリキュラムセンターにお問い合わせください。

(TEL024-553-3193)



② 図書館の活用

図書館の資料を検索することもできますので御紹介します。

ア 福島大学附属図書館蔵書検索(OPAC) (<http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/>)

福島大学附属図書館は、休日も開館しています。登録者への貸出しもしています。詳細は福島大学附属図書館にお問い合わせください。

イ 福島県立図書館横断検索システム

(http://www.cross.library.fks.ed.jp/fukushima_top.html)

県立図書館や市立図書館など提携している図書館の書籍を検索できます。県内の図書館の中には例えば県立図書館の図書を、希望者の最寄りの図書館まで送るサービスを実施しているところもあります。お住まいの地域の図書館にお問い合わせください。

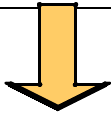
3 新たな授業を構想する

授業を振り返り、自分の目指す授業のイメージと実際の差異に気づき、改善すべき課題があれば、実行可能な手立てから、少しずつであっても継続して実践していくことが大切です。

これまで述べたことを実践に生かしていきましょう。その際に大切なのは、授業構想をより明確にすることです。やみくもに実践するのではなく、「何が大切なのか」「どんな取り組みをしようとしているのか」等、しっかり先を見据えて、その構想を具体的にしてみましょう。

例えば、前述のF先生の場合には、第5時の振り返りをもとに、次のように第6時の授業の構想を変更しました。

第5時「考えの練り上げがなく、深まらなかった。」



同僚との情報交換の際の助言により、導入場面の問題提示とグループの話し合いのさせ方を工夫することにした。

第6時

<導入> 前時までの学習内容から、どの生徒も考えられる易しい問題をまず提示し、次に条件が違う少し難しい問題を提示することで生徒の課題解決への意欲を高め、練り上げにつなげていく。

<展開> 小グループでの活動を始めるときに話し合いの留意点を示し、それぞれの考えを深められるようにする。

一つの試みが授業改善のきっかけに

ここまで述べてきたことを踏まえて、日常的に授業改善を進めるために、まずは、自分の授業を振り返り、「できるところ」から、また「必要などころ」から授業改善を試みてみましょう。

自分の授業を何とか改善したいという思いと日ごろの授業における一つの試みが、授業を変えるきっかけになると考えます。次に幾つかの事例を御紹介します。

～T先生の板書の工夫～

子どもの「ノートの文字の乱雑さ、ノートづくりの未熟さ」が気掛かりだったT先生は、これを何とかしたいと思っていました。そこでT先生は、丁寧な文字で板書するなどいろいろ工夫しているうちに、子どものノートづくりはもちろん、自分の授業までも変わってきていることに気がきました。

T先生によれば、子どもがノートづくりのしやすい板書を教材研究を踏まえながらあれこれ考えて実践していくうちに、「板書は教師自身のノートであること」に気付き、「板書内容は教材研究の一分野であり、指導計画の中にあらかじめセットされているべきものであること」、また「板書は授業の中身を圧縮したエキスであるから、学習内容の相互関連が視覚的にとらえられるよう工夫しなければならない」ことを学んだということです。

自分の板書を変えようというT先生の「できるところ」からの試みは、自分の授業全体までも変えることにつながっていきました。

～K先生の指名の工夫～

K先生は、挙手した子どもを頼りに指名している自分の授業を振り返り、「手を挙げている子どもとしか授業をしていないようでおかしい。何とか指名の工夫をしなければ・・・。」と、挙手に頼らない指名で授業を進めることにしました。

K先生によれば、

「実際にやろうとすると、だれを指名していいか分からなくなってしまった。だれでもが発表できるようにするにはどうするか、指導目標達成のためにはどんな発問がいいか、発問に対して子どもはどんな考えを持っているか、子どもの反応をどう受け止めるべきか、どんな話し合いをして、どんな板書にするか、子どもの考えをどうまとめていくかなど、授業の構成や子どもの学びの状況等、多くのことにあれこれ思いを巡らすことになり、授業改善への大きな足掛かりとなった。」

ということです。

教師の働きかけは、児童生徒の反応や学習内容等と絡み合い、連動し合っています。前述のT先生、K先生の実践からもうかがえるように、児童生徒の望ましい学びの姿を具現するために、自分の授業の「ここを工夫していきたい」という小さな一つの窓口から変えようという試みが、授業改善につながるのです。

授業力向上を目指して

教師が目指す授業のイメージを実現することは、とても難しいことなのかもしれません。例えば、児童生徒からの活発な反応はあるが、それが目指す授業のイメージと合致していないということもあります。「まだまだの自分」に気付き、理想に「近づきたい」と強く願うことなしには、前進はあり得ないのではないのでしょうか。

未来を担う福島の子どもたちのために、私たち教師がスクラムを組んで、日々の授業改善を図っていくことが「授業力向上」につながるはずです。各学校の校内研修における授業研究を、教師が多面的、客観的に授業を振り返る視点を持つ契機とし、各自が授業実践とその記録を積み重ねるとともに、同僚との情報交換を通して、授業力向上を目指していきましょう。